

日本元炆大炆

井北
市至
众曰
曰虫

日本机戦連盟
厳選
燐字
東島通商語
辞書

田昌

[illegible]

DUH.11-11-:-:メ
曰夆兀歟大炊

ХБДЗЦЕЦХ

[illegible][illegible]

ХН, бѳээгнн цэ юеенз #з#зигн зигѳѳю би з#зигн хигѳѳух ззцэи зѳх зигн зѳиб югх дигю дигѳѳигн дг диг зигн цѳибиб. дэ диг цээ ззегхнн юеогн дэ диг зюигн зигн шигюю цэ дг диг.

Цэ ебзипп юэзз дп дуи иидиизипп ззесх хп збзиппипп зиппх. дэ зпцрпипп епцп ебзипп зиппх зипп бзд хп дэ дуиу ебзиппипп епцп юпххэю дуиебпипп зипп збзиппипп зипп ебзиппипп зипп бзд.

ЮНХХЭЮ РШЕБНЕ ЗЧП ЗБИБРШ

ま え が き

西暦 2018 年 4 月 8 日に成立して以来、日本机戦連盟は日本において我々の文化を案内し、人と人の心をつないできた。だが、その言語文化に親しむためには、非常に多数の場所に混沌と散らばった資料を読み込むことが要求されてきた。

日本机戦連盟としてもただ手をこまねいていたわけではない。西暦 2023 年には、アイル共和国文化省対外広報処日本語部署（アイル共和国文化省対外広報処日本語部署）による冊子 アイル共和国文化省対外広報処日本語部署（邦題：『84 字でらくらく燐字入門』）を頒布した。この本は、アイル共和国の全ての人が知っている 84 種の燐字を示すものであり、これを通じて燐字文化に親しんでもらおうと努力した。西暦 2024 年には、かるた アイル共和国文化省対外広報処日本語部署（邦題：『84 字でらくらく燐字入門』）を頒布し、遊びを通じて東島通商語を構成する 18 の文字を記憶してもらえよう努力した。

しかしながら、たとえ 84 の燐字と 18 のペメセペ文字を暗記したとしても、それだけでは我々の声を聞いて理解することはできないし、我々に思いを伝えることも極めて困難であろう。

いま、我々は、語を選び抜き、辞書を作った。この辞書の内容を全て理解することで、日本机戦連盟が送り出してきた全てを読むことができるだろう。

西曆 2025 年 5 月 4 日

日本机戦連盟

東諸島共和国連合

众丛众昇



編集

hsjoihs [細承充]

編集協力

双叶 舞 [粋兀豆]

meloviliju [柶斗罍]

校閲

Mítrov [巾ワ臼]

双叶 舞 [粋兀豆]

meloviliju [柶斗罍]

紙面レイアウト

えすわい [巾帙刀]

DTP組版

hsjoihs [細承充]

親字グリフ手書き

えすわい [巾帙刀]

フォント製作

えすわい [巾帙刀]

hsjoihs [細承充]

たもと [凡凡凶]

CI/CDパイプライン構築

れもん [芑耨杏]

組版ソフトウェア

Vivliostyle (<https://vivliostyle.org/>)

𠂔𠂔𠂔𠂔

市 玉

𠂔 字

この辞典の使い方

1. 見出し字

1-1. 収録字の選定

まえがきで提示した「日本机戦連盟が送り出してきた全てを読む」という観点に基づき、330 字程度を選定するとともに、異体字も 50 ほど採録した。

1-2. 分類と配列

「日本机戦連盟 厳選燐字辞書」では、燐字に遭遇した読者が、その字形をもとにして音と意味を探し出せるようにすることを目的として編纂されている。それゆえ、𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺で用いられている、書き始めの筆画に基づいた分類を用いることで見出し字を配列することとした。

「**図9**」においては、字の書き始めのうち、最初の2回分の「筆の動かし方」をもとに分類することを原則とする。これはつまり、1画目が一方に引っ張る単純なものであれば先頭2画を取り、1画目が折れ線であるときには1画目だけを見て判断するということである。

例外として、「単純な1画のみ」で構成される字は、それを2回繰り返して判断する。要するに、たとえば丨の字は𠄎の爪見出しのもとに配列されるということである。さらに、ノで始まる字は数が多いため、検索の便宜のために、ノの中でも乂および犬で始まる字は別の爪見出しの下に配置した。また、初画が口の一部を成している字は口に配置することを原則としつつも、これまた所属字が多いことを鑑みて日および田で始まる字は別立てとした。これらの例外は𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎における既存の慣習に従ったものである。

同じ爪見出しの下に属する字の間の順序は特に定めなかったが、近形の字をなるべく近くに配置するよう心掛けた。

1-3. 漢字転写

燐字文化に対する日本語話者の親近感を醸成する目的で、アイル共和国文化省対外広報処日本語部署はそれぞれの燐字の字体ごとに漢字をあてがい、「漢字転写」を定めている。(一例を挙げると、兀炊という語を「机戦」と表記して「きせん」と読むといった行為は、この漢字転写に基づくものである。)日本語話者にとって字の意味や文の意味を概括する上で極めて有用であ

ることを鑑み、この辞書では漢字転写を墨付きカッコの中に入れて表示することとした。

1-4. パイグ音とその表記

隣字はパイグ語のみが用いる字ではなく、パイグ語も隣字のみを用いる言語ではないが、品詞に対する解釈を入れずに隣字列を音声に起こす方法としてパイグ音での読み上げが広く行われている現状も踏まえ、パイグ語での慣習的な読みが安定している字についてはその読みを掲載した。吉リ矛現象などによって発音に変化が生じるものについては、変化後の発音に基づいて表記した。また、パイグ音からの検索を可能とすべく、巻末に仮名索引を用意した。

2. 見出し語

2-1. 収録語の選定

隣文において、なにを「単語」と認定するかは極めて難しい問題である。この辞書では、実用性に資するべく、構成字から語義を導き出すことが本質的に困難であるような音写語や固有名詞といったものを積極的に収録した。特に、豊かなボードゲーム・カードゲーム文化に関心の強い読者の参考に供するため、これらにまつわる用語を重点的に扱った。

収録語は隣字圏全体に広く通用するものを優先しつつ、選定した約 330 字のみによって構成されている語だけを収録した。また、パイグ語簡易辞書としての利用も可能となるよう、パイグ語での用例を優先し、例文もパイグ語の発話として自然なものとなるよう心掛けた。

ただし、パイグ語で頻用される語であっても、表音文字であるパイグ文字で書くのが一般的である語については、それを無理に当て字した隣字表記を掲載することは避けた。具体的には、「トゥー→ドゥー→ルー→ドゥー→」「トゥー→ルー→ドゥー→ルー→」（ともに『ほにやらら』『なんちゃら』などの意味）を強引に書き表す𐄧𐄧𐄧𐄧・𐄧𐄧𐄧𐄧・𐄧𐄧𐄧𐄧といった表記は見出し語としていない。

3. 品詞欄と品詞分類

それぞれの見出し語には、パイグ語での用例をもとに、品詞欄を設けた。その語形変化の乏しさも伴って、パイグ語の品詞論は未だ定説を見ないが、便宜上次のような基準を設けて品詞分類を行った。以下、「単語未満」・「一単語」・「複数の単語の組み合わせ」の3種類に大別して論じる。

3-1. 単語未満

独立した要素として文中に単独で登場することのできない、いわば「単語未満」としては、「略号」・「接頭辞」・「接尾辞」の3種類を認定した。

「略号」とは、文中で用いるのではなく、もっぱら図や記譜などの場面で用いられる、表意的な記号としての燐字の使用を意味する。

単独の語としてではなく、他の字や語の前や後ろについて結合して単語を形成するようなものを「接頭辞」「接尾辞」と分類した。

3-2. 一単語

人や物などを表す語、およびそのような語と似た構文的ふるまいを見せる語を「名詞」と分類する。

物事の動作や状態などを表し、文の中核となる語を「動詞」と分類する。その中でも、状態を表す傾向が強く、構文的にも目的語や進行相マーカーなどを取りづらいものを特に「状態動詞」と分類する。また、動詞のうちその目的語として節を取るものは「節要求動詞」と分類する。

形式上は文の中核の位置に生起するものの、実質的な意味を持たず、ただ主部と述部の間を分離しつつ繋ぐ役割を持つものは、「繋詞」と分類する。

名詞を直後に伴って、文全体を修飾するようなフレーズを作る語を「前置詞」と分類する。また、名詞のうち、前置詞を用いることなく文の舞台となる時間・場所を表せるものを、それぞれ「時間詞」「場所詞」と分類する。

他の文中に現われるのではなく、感情を直接表現するために発される類の語を「間投詞」と分類する。その中でも、その感情の原因を直後に叙述すべく節を取るものは「節要求間投詞」と分類する。

直後の名詞を構文的・意味的に修飾する傾向が強いものは便宜上「連体詞」と分類する。ただし、述語としての用法が多く見られるものは基本的に「状態動詞」と分類した。

文末に来て、文に対してニュアンスを付加する役割を持つ語を「文末助詞」と分類する。

直前に数量表現を伴い、その量や順位といったものを具体化する表現を「助数詞」と分類する。

文と文を繋ぐ役割を持つ語を「文接続詞」、名詞と名詞を繋いで新たな名詞を作る語を「名詞接続詞」として分類する。直前に名詞を取ることも文を取ることもできるものは、便宜上「特殊接続詞」として分類した。

動詞の直前に置かれ、動詞の意味を変容させたり意味を付加したりする語を、ここでは一律に「前置助動詞」と分類した。助動詞という名前をこれほどまでに幅広い語に付与することには若干のためらいもあったが、動詞との間に名詞が介在できないという特性を曖昧性なく表現するにはこの品詞名を採用することが必要であると判断した。また、前置助動詞の中でも、命令や依頼の意味を表し主語をあらわに用いないものを、「命令性前置助動詞」と分類した。

用言に由来して動詞の後に置かれる語については、動詞との結合が語彙的と見なせるようなものは接尾辞の一種とし、動詞を選ばず結合でき必ず動詞の直後に置かれるものを「後置助動詞」、動詞との間に別の語が介在でき比較構文などが後続しうるものを「後置様態副詞」と分類した。

歴史的経緯によって成立し、決まり文句として定着した4文字からなる表現は「四字熟語」として分類する。多くは田喜昌に代表されるラネーメ古典に由来するような表現であり、現代パイグ語の品詞論には必ずしもそぐわない構成となっている。

3-3. 複数の単語の組み合わせ

複数の字が組み合わせあって単一の意味を表していると認定できるものの、その構成要素となる字が文中では必ずしも連続せず、間に他の語が割り込む余地があるようなものが多数存在する。これを単語と認めず、辞典に収録しない方針も可能ではあったが、隣文の言語感覚をしっかりと理解する上で、これらのいわば「分割可能な熟語」の把握は不可欠であるため、積極的に掲載するよう努めた。

分割可能なそれぞれの部分が文成分として明確に認定できる場合は、「動詞＋目的語」「主語＋動詞」「動詞＋前置詞」などと表記し、例文を通じてどのような位置で分割可能となるのかを示すこととした。そのような分析をする根拠が薄弱である場合は、無理に既存の品詞論に当てはめず、「構文」とのみ表記することとした。

4. 語義と訳語

4-1. 語義の分類

語義には、先頭に品詞を記した。品詞が同一であっても、語義が大きく異なる場合については行を分けた。

4-2. 補足説明

語が持つ意味に対しての補足説明は、() で示した。語自体のパイグ語での頻度や構文的制約などについて付記すべきことがある場合は、[] で示した。また、必要に応じて行を改め追加の説明を行った。

5. 例文

語の用い方を簡潔に示すため、一部の見出し語には例文を添えた。例文はパイグ語の発話として自然なものとなるよう心掛けつつ、パイグ文字で表記される語を避け、選定した隣字だけで全て書ける文を掲載し、訳文をつけた。解釈の幅を適切に伝えるべく、必要に応じて1つの例文に対して複数の訳文を掲載したり行を改め追加の説明を行ったりするなどして明確さを追求した。

パイグ語文法 概略

第1部：入門

1. パイグ語について

パイグ語（パイグゲウ・チェブ→）は、アイル共和国で話されているラネーメ語族の言語です。アイル共和国の人口の約18%、つまり1823万人（ピリフィアー暦2007年のアイル共和国民部省国勢調査による）が第一言語として使っています。また、東諸島共和国連合やユエスレオネ連邦にも第一言語として話す人がいます。主な話者は、アイル共和国の首都部、特にクワケ郡（図1）に集まっています。首都部の郡では、パイグ語が公用語として認められています。机戦（セウトノカイク・）という伝統ゲームの用語や、燐字（リン・マン→）という表意文字を使った古い文章語「伝統文語」の読み下しにパイグ語がよく使われます。そのような文化的影響力が大きいため、母国語として使っていない人でも、アイル共和国内外で約530万人が話していると推測されます。

言語のタイプとしては、声の上がり下がりの意味に関わる声調言語です。動詞が活用しなかったりと語形変化が少ない特徴があります。また、1音節が1つの意味を持つ最小の単位に対応することが多いです。パイグ語は、表記に表意文字である燐字を中心に使い、音を表すパイグ文字を補助的に使いますが、ここではカタカナを用いた表記で説明しま

す。このカタカナ表記はうまく工夫してあるので、パイグ語の発音を直感的に、かつかなり正確に理解することができます。



図1：アイル共和国略地図（太字は首都部）

2. 発音

この文法書（および辞書）では、カタカナを使って発音を示しています。そのため、カタカナに慣れ親しんだ方は見たまま読んでいただければ、大体パイグ語の音を再現することができます。ここでは、注意が必要な部分についてのみ述べ、詳しくは第3部で述べます。日本語話者が

区別せずに発音してしまいがちな音は以下の通りです。ズィやディは日本語のジとは異なる音なので注意してください。

- スィとシ
- ツィとティとチ
- ズィとディ

また、複数の文字で一つの音を表すことにも注意してください。複数の文字で書かれているものも、できるだけ一息で言うように頑張ってください。特にエウーは発音が難しいです。オーに似た母音ですが、唇を丸くせずに発音するイメージで発音します。英語が堪能な人は、イギリス英語の bird に近い、と思っていいかもしれません。

また、母音の後には、さらに子音が続くことがあります。ここに繋げることができる子音は以下の5つです。

ブ	ト	ク	ム	ン
---	---	---	---	---

例えば「アト」と発音する場合、最後に母音をつけて「アト」のように発音してしまわないように注意しましょう。

声調

パイグ語は声調言語といって、音の高さが変わるのが大切な言語です。パイグ語は3種類区別します。

→	長く、高く	丰 ヨウ→（真っ直ぐな） 丞 ホウ→（量が多い、裕福な）
↗	長く、低く （最後が浮き上がりがち）	𠂔 ヨウ↗（牛） 𠂔 ホウ↗（骨）
・	短く、中間の高さで	夫 ヨウ・（リーダー、王） 𠂔 ホウ・（柔らかい）

音の高さが変わるのが大切とはいえ、「ヨウ→」「ヨウ↗」「ヨウ・」のような三種類が全て揃っている例はそれなりに珍しく、声調の区別が若干おろそかになっていても、たいていの場合は聞き取ってもらえます。

「三」を意味する「オム↗」は日常的に「オム→」と読まれることも多いですし、「数」を意味する「マク↗」の代わりに「反発する」の意味の「マク→」で発音することもあるほどです。

単語例（発音して確認しておきましょう）

単語	意味
兀𠂔（セウト↗カイク・）	セツカイク
𠂔𠂔（ブー→シュー→）	6面ダイス
𠂔𠂔（タム↗ポク・）	深緑

3. 簡単な文法

語順と構文

動詞の活用や「～を」といった助詞などを使って単語の間の関係性を表す日本語と異なり、活用や助詞の少ないパイグ語では、語順がとても重要です。たとえば、「スクノヤム→ザウブ→」なら「人が動物を食べる」ですが、「ザウブ→ヤム→スクノ」なら「動物が人を食べる」の意味です。

大	口	勿
スクノ	ヤム→	ザウブ→
人	食べる	獣
人が獣を食べる		

勿	口	大
ザウブ→	ヤム→	スクノ
獣	食べる	人
獣が人を食べる		

学び始めの段階では、英語を連想するとよいでしょう。たとえば I drink water. という文では、文の真ん中にある drink が「飲む」という動詞になっていて、動詞の前に来ている I によって「誰が？」という情

報が、動詞の後の water によって「何を？」という情報が提供されていますね。

このように、文の中心を成す動詞を見つけることができれば、それ以前の部分がだまかに「誰が？／何が？」、それ以降の部分が「誰を？／何を？」に対応する、と考えていくと、簡単な文を読んでいくことができます。

ただし、「私は兵士です」のように名詞が述語となる文の場合は、動詞がありません。

処	失
パイ↑	カウク↑
わたし	兵士
私は兵士です。	

このように主語と述語の切れ目がわかりづらくなる場合、「パイ↑カ→カウク↑」（わたしは兵士です）のように、「カ→」を使って切れ目を示しても構いません。

否定文

肯定文を否定文にするには、「食べる」のような動詞の前にムン→（～しない）を付けます。

大	、	口	仄
スクヅ	ムン→	ヤム→	ズィューヅ
人	～しない	食べる	石
人は石を食べない。			

動詞がない場合は、「パイヅムン→カウヅ」(私は兵士ではない)のように「ムン→」を単体で使ったり、同じ位置で「カー→ムン→」を使うことによって示します。

疑問文

疑問文は、肯定・否定で答えることのできるものについては文末に「ユンヅ」を付けます。

叔	口	米	匂
ムアーヅ	ヤム→	モウ→	ユンヅ
あなた	食べる	米	～か？
あなたは米を食べるか？			

これに答える場合、「アイムヅ」(はい)、「ムン→」(いいえ)を使うこともできますが、単に「パイヅヤム→」(私は食べます)のように返答することもあり多いです。否定文を疑問文にするときは肯定文と同じく「ムアーヅムン→ヤム→モウ→ユンヅ」(あなたは米を食べないのですか？)のように言います。これに答える場合、「アイムヅ」(はい)、

「ムン→」（いいえ）のように日本語と同じように答えることもできますが、やはりこの場合も「パイ↑ムン→ヤム→」（私は食べません）のように言うのがより自然です。

なお、「ユン↑」が無くとも、文脈によっては疑問文と解釈されやすくなることがあります。この場合、文章の最後を上げ調子にして疑問文であることを示します。この場合であっても単語の声調をしっかりと区別することに注意してください。

一方で、「何」「誰」「いつ」といった疑問詞に対しての答えを求める疑問文については、「ユン↑」を用いません。以下のように聞きたい箇所を疑問詞に置き換えることで疑問詞を作ることができます。

何	□	何
ムア→↑	ヤム→	ナン↑
あなた	食べる	何
あなたは何を食べる？		

簡単な疑問詞

単語	意味
𐀀 (ナン)	何
𐀀𐀁 (ナンスク・)	誰
𐀀𐀂 (ナンカク・)	いつ
𐀀𐀃 (ナンホウエウ・)	どこ
𐀀𐀄 (ナンシト)	なぜ
𐀀𐀅 (エウム・ナン)	どう

第2部：より詳しい文法

パイグ語を使って文意を伝えるためには、単語を覚えるとともに、それをどうやって使うかを意識しておく必要があります。そのために、ここではパイグ語の文法構造についてもう少し詳しく見ていきましょう。

なお、どの言語でもある程度はそうですが、パイグ語では『○○が正しい』というよりも『普通は○○という言い方をする』ということを把握することの方が重要です。以下で解説する事項を目安にしつつ、実際にどうやって使われているかを具体的に追いかけて、頭をパイグ語に慣らしていくとよいでしょう。

日本語において、「窓を見る」とは言いますが、「美しいを見る」とは言いませんね。これはなぜかといえば、名詞「窓」は助詞「を」と結び

つくことができる一方で、形容詞「美しい」は助詞「を」と基本的には結びつかないからです。このように、その言語の中でその単語がどう振舞うかということをよく観察して「名詞」「形容詞」といった分類をしています。この分類のことを「品詞」と言います。

品詞について理解しておくことで、ある単語の品詞が何かわかれば、「その単語をどう扱えば自然な文が作れるか」を理解しやすくなります。

名詞

人や物などを表す語、またはそのような語と似たふるまいを見せる語を「名詞」と呼びます。先ほど簡単な文の作り方でも見たように、名詞は文の主語になったり、「～は～である」のような文で述語になったりします。

また、名詞の一種として「場所詞」や「時間詞」としたものがあります。これらはよく文頭に付けることでそれらが起きる場所や時間を示すことができる単語類です。

台田	爰	軒	爰曰
カー→キアー→	パイ↑	ヌイ↑	ペウク↑チェブ→
今日	私	勉強する	パイグ語
今日私はパイグ語を勉強する。			

動詞

物事の動作や状態などを表す語を「動詞」と分類します。先ほど少し触れたように動詞は文の中心となるので、動詞を見つけることが出来れば文章の構造をつかみやすくなります。しかしパイグ語ではどれが動詞か見分けづらいので、よく使う動詞を少しずつ覚えていき、単語の切れ目を意識していくことが大切です。

状態動詞

状態動詞は通常の動詞と同じく、動詞になることができます。特筆すべきは、目的語「～を」を取りづらく、直後に名詞が来た場合には「状態動詞に修飾された名詞」とみなされやすいということです。たとえば、汚れない様を表す「リン・」という状態動詞は、状態動詞としての性質が強いため、直後に「スクㇿ」(人)を付けた「リン・スクㇿ」は「人を清める」というよりは「清らかな人」と解釈されやすい、ということです。

また、後述する「イエ・」を用いた比較の構文は、基本的に状態動詞に対して使い、そうでない動詞に対して「イエ・」を使うと動作が起きた時間・場所を指すのが普通です。

前置詞

英語には in, at, on などの「前置詞」という品詞があり、名詞の前につくことで「～が」でも「～を」でもない関係を表すことができるのでした。

パイグ語にも似たようなものがあり、例えば前置詞「イエ・」は「～に、～で」という意味を幅広くカバーします。

𐀀	𐀁	𐀂	𐀃
パイ𐀄	ヌイ𐀄	イエ・	ムト𐀄
私	勉強する	～に／～で	家
私は家で勉強する。			

少々特殊な「イエ・」の用法として、比較の意味を表すというものもあります。

𐀀	𐀅	𐀂	𐀆
パイ𐀄	ロト𐀄	イエ・	チャプ𐀄
私	短い	～より	あの人
私はあの人より短い。			

なお、パイグ語においては動詞と前置詞の区別はある程度あやふやなものであり、例えば「ズイ→」などは動詞としても前置詞としても見ることができます。

己	𐤒	𐤑	𐤓	𐤕二
チャプ𐤒	ズイ→	カウン→	モク→	ナイプ𐤒ホウエウ・
あの入	～を使う／ ～を使って	車	行く	職場
<p>あの入は車を使い、職場に行く。</p> <p>あの入は車で職場に行く。</p>				

節要求動詞

節要求動詞は、主語・動詞・目的語などを持つような大きな塊を後ろに置くことができる動詞です。

具体例を見てみましょう。

𐤕	𐤔	𐤕	𐤕
パイ𐤒	ヒアー→	ムアー𐤒	ナイプ𐤒
私	望む	あなた	働く
私はあなたに働いてほしい。			

この文では、「ヒアー→」が「～することを望む」という節要求動詞として振る舞っています。「ムアー𐤒ナイプ𐤒」（「あなたが働く」）という節がその後ろに来ることによって、文全体としては「私はあなたに働いてほしい。」という文になるのです。

処	忝	己	ソ井
パイノ	ティム→	チャプノ	ティユ・ザクノ
私	待つ	あの入	戻ってくる
私はあの入が戻ってくるのを待つ。			

この例では、「ティム→」が「～することを待つ」という節要求動詞で、直後に「チャプノティユ・ザクノ」（「あの入が戻ってくる」）という節が来していますね。

前置助動詞

節要求動詞と似て非なるものとして、この辞書で「前置助動詞」と呼んだ語群があります。前置助動詞は、動詞の前に置いて動詞に変化をもたらしたり追加情報を付加したりする語です。

さっそく具体例を見ましょう。

処	兀	机
パイノ	ピユ・	ナイプノ
私	～できる	働く
私は働ける。		

この文では、「ピユ・」が前置助動詞として振る舞っており、直後の「ナイプノ」（働く）という動詞を「働ける」という意味に変化させています。

なお、前置助動詞は、複数置くことができます。

大	＼	兀	口	仄
スクヅ	ムン→	ピュ・	ヤム→	ズィュー→
人	～しない	～できる	食べる	石
人は石を食べることができない。				

そう、否定文を作るために動詞の前に置いていた「ムン→」は、実は前置助動詞だったのですね。

「動詞＋目的語」で1つの意味をなすもの

動詞の後ろに名詞が来て「～を」の意味を表しているとき、それを「目的語」と呼ぶのでした。

実は、パイグ語においては、特定の動詞と特定の目的語を組み合わせたときに、特有の意味となることがよくあります。

たとえば、「ター→」は「見る」、「アク→」は「本、書籍、書物」という意味ですが、これを組み合わせて「ター→アク→」とすると、単に本を視認するだけではなく、「本を読む」という意味を含意するようになります。

𠂔	𠂔	𠂔
パイノ	ター→	アク→
私	見る	書籍
私は本を読む。		

ということで、この辞書では「ター→アク→」に「読書する」という訳語を付けて掲載しています。

とはいえ、あくまで「ター→」（見る）という動詞の後ろに「アク→」（本、書籍、書物）という目的語が続いているという「動詞＋目的語」の構造を取っているので、この動詞と目的語の間に他の語が割り込んでも構いません。

𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
パイノ	ター→	コク→	アク→
私	見る	赤い	書籍
私は赤い本を読む。			

この文では「ター→」と「アク→」が分断されてしまっていますが、それでも「読む」という意味が保たれるのです。

この「ター→アク→」のような語については、辞書内でも[動詞＋目的語]と表記し、分断されるかもしれないということをお伝えしています。

接続詞

さて、ここまでで簡単な文を作り上げる方法を学んできましたが、もっと複雑な内容を伝えるにはどうすればいいのでしょうか。

そのためには、ここまでで勉強した要素を結び合わせるための「接続詞」が必要となります。

この辞書では、

- 文と文を繋ぐ「文接続詞」
- 名詞と名詞を繋ぐ「名詞接続詞」
- 「～の」といった意味を表す「特殊接続詞 ヘ」

の3種類に分けて分析します。

文接続詞として最も基礎的なのは、「ワ・」という語です。

𐤆	𐤅	𐤃	𐤄	𐤅	𐤁	𐤀
パイ↑	ター→	アク→	ワ・	ムアー↑	ヤム→	ヌアー↑
私	見る	書籍	そして	あなた	飲む	水
私は本を読み、あなたは水を飲む。						

「ワ・」の意味をさらに限定したいときには、𐤆𐤄「アト・ワ・」(加えて、さらに)や𐤆𐤅「パウ→ワ・」(しかし、ただし)などと言います。

また、「ヘウム・」という語を使うことで、「～なので」や「～ならば」といった前後の文の因果関係を言うことができます。

爰	昇	材	爰	火	夾
ムアー↑	ザク↑	ヘウム・	パイ↑	ヒアー→	カイト・
あなた	来る	なので	私	思う	よい
あなたが来るので、私は嬉しい。					

小	亅	材	爰	兀	皿	空
アイク↑	アイム↑	ヘウム・	パイ↑	ピュ・	ター→	アク→
光	ある	ならば	私	できる	見る	書籍

光があれば、私は本を読める。

以上が、文と文を繋ぐ文接続詞でした。これと同様に、名詞と名詞を繋ぐ「名詞接続詞」もあります。

己	尢	爰	爰
チャプ↑	アト・	パイ↑	ナイプ↑
あの人	～と～	私	働く
あの人と私は働く。			

他にも、「ユ・」（または）などが名詞接続詞にあたります。

書け

書け

書け

書け

虫と早を2mmぐらい書く

文末に置かれ、文にニュアンスを付け足すような要素を文末助詞と
す。最も古く、中世的な文末助詞が「ア、イ、エス」です。

旭	光	口	炳	世	口	マ	炳

パイナ	ヒア→	ヤム→	ア・	ヤン→	ヤム→	ク・	ア
私	したい	食べる	なあ	作る	食べる	物	よ

ちなみに、先ほど疑問文を作るときに使った「ユン↑」も文末助詞です。

さて、ここで、「この車は私のものだ」と表現することを考えてみます。「この車」は台罫（カー→カウン→）になります。「私のもの」は、特殊接続詞へを使って処へ（パイ↑ア・）です。では、「この車は私のものだ」は「カー→カウン→」の後に「パイ↑ア・」を置いて、以下のようになればよいのでしょうか？

台	罫	処	
カー→	カウン→	パイ↑	ア・
この	車	私	

実は、これでは上手くいきません。というのも、このような特殊接続詞へが文末に来てしまうと、文末助詞である処に聞こえてしまうのです。結果として、「カー→カウン→パイ↑ア・」は以下のように解釈され、

台	罫	処	処
カー→	カウン→	パイ↑	ア・
この	車	私	だなあ
この車は私だなあ。			

「この車は私だなあ」という文になってしまい、自分自身が車であると主張してしまうことになってしまうのです。

ということで、「～のもの」で文を終えたい場合には、そこにさらに文末助詞 叛 を加え、このように言います。

台	畵	炆	ハ	炳
カー→	カウ→	パイ↗	ア・	ア・
この	車	私	のもの	
この車は私のものだ。				

後置助動詞 田

台と廿

第1部では、主語と述語の切れ目がわかりづらくなる場合に「パイ↑
カー→カウク↑」（わたしは兵士です）のように、「カー→」を使って切
れ目を示しても構わないということについて触れました。

火	缶	缶	台	火	人	叛
ムアーノ	チャウ・	カウン→	カー→	パイノ	ア・	ア・
あなた	作る	車	～は～です	私	のもの	
あなたが作った車は私のものだ。						

また、文章語では、このような 台 の代わりに 世 を置くこともあります。

輻	世	疾	ハ	空
ヤク→	ヤン→	ユ→	ア・	アク→
法律	～は～です	政府	の	文書
法律は政府の文書だ。				

このような 台 や 世 をまとめて、この辞書では「繋詞」と呼んでいます。

数量表現

書け

書け

書け

書け

書け

書け

書け

書け

読解

（最後にデカイ文を置いて、品詞分解・グロスだけしておく、とかやってもいいかも）

第3部：仮名表記の細則とラテン字転写

パイグ語のカタカナ表記について、もう少し細かいことを書いておきましょう。

パイグ語の子音は以下の通りです。

パ行	バ行	マ行		
サ行	ザ行	シャ行	ツァ行	チャ行
タ行	ダ行	ナ行	ラ行	
カ行	ガ行	ハ行		

パイグ語であり得る母音のパターンは、以下の通りです。

基本	アー	エー	ウー	イー	アイ	アウ	エイ	オウ	ユー
ヤ拗音	ヤー	イエー				ヤウ	イエイ	ヨウ	
ワ拗音	ワー	ウェー		ウイ	ワイ	ワウ		ウォウ	

子音と母音を組み合わせたものが以下の表です。

基本	パー	ペー	プー	ピー	パイ	パウ	ペイ	ポウ	ピュー
ヤ拗音	ピアー	ピエー				ピアウ	ピエイ	ピオウ	
ワ拗音	プアー	プエー		プイ	プアイ	プアウ		プオウ	

「エイ」「イエイ」以外の母音の後には、さらに子音が続くことがあります。ここに繋げることができる子音は、前に紹介した通り「プ」「ト」「ク」「ム」「ン」の5種類です。

トを例に下に示します。

基本	パト	ペウト	プト	ピト	パイト	パウト	ポト	ピュト
ヤ拗音	ピアト	ピエト				ピアウト	ピオト	
ワ拗音	プアト	プエウト		プイト	プアイト	プアウト	プオト	

なお、このように、母音の後にさらに子音が続く場合、母音部分があり長く発音されないことを踏まえて、仮名表記では長音符号を省いておきます。似た理由により、この際には「オウ」「ヨウ」「ウォウ」の「ウ」も省略します。

また、「・」の声調がついていると短く発音されるので、この場合も仮名表記での長音符号は省いておきます。（ゆえに、「パイ[↑]ゲウ・チェプ[→]」ではなく「パイ[↑]ゲウ・チェプ[→]」と表記したのです。）

ただし、「オウ・」「ヨウ・」「ウォウ・」の「ウ」はしっかりと発音されるため、この「ウ」は省かずに表記します。

エ段の母音

「エウー」に対応するヤ拗音の欄が、「イエウー」ではなくて「イエー」と書かれていたことにお気づきの方もいるかもしれません。これは、実際にヤ拗音においてはかなり日本語の普通のエ段に近い発音になることを反映したものです。

同様の現象として、シャ行・チャ行の後に「エウー」の母音が来たとときも、かなり日本語のエ段に近い発音になります。これを反映して、カ

タカナ表記でも「シェー」「チェー」ではなく「シェ」「チェ」と書いています。

つまり、「イエ」「シェ」「チェ」のどれについても、何も気にせず日本語での普通の発音をしてもらえれば全く問題ありません。

「ホ」と「フ」

子音と母音を組み合わせた表として、先ほどこのようなものをお見せしました。

基本	パー	ペー	プー	ピー	パイ	パウ	ペイ	ポウ	ピュー
ヤ拗音	ピア	ピエ				ピアウ	ピエイ	ピオウ	
ワ拗音	プア	プエ		プイ	プアイ	プアウ		プオウ	

この表はパ行ですから、ここから単純に半濁点を取り除いたらハ行の表になりそうなものです。

しかしながら、ハ行のカタカナ表記は、例外的に以下のような形を取っています。

基本	ハー	ヘー	フー	ヒー	ハイ	ハウ	ヘイ	ホウ	ヒュー
ヤ拗音	ヒア	ヒエ				ヒアウ	ヒエイ	ヒオウ	
ワ拗音	ホア	ホエ		ホイ	ホアイ	ホアウ		フオウ	

具体的には、「ア」「イ」「エ」の文字の直前では、「フ」の代わりに「ホ」と表記しています。

このような表記を採用しているのは、英語の f のような発音になってしまうのをなるべく避けるためです。中華料理の「花椒」は「ファージャオ」というよりも「ホアジャオ」のほうが原音に近い、ということと同じような話です。